

六  
花  
11



俳句雑誌りつか  
2017 (平成29年)  
cover design Yuna Mizuno

山田六甲

つがる

かん  
間

走馬燈吾の背中へ回りけり  
大空は一つ秋雲のかず知れず  
後の月めつこうさん 岡山を離りけり  
松手入れすみたる昼の星見えて  
山車を解く粟田祭のだらり帯  
長持に鏡の返す秋落暉  
絶景かな絶景かなと月の声  
皿引かれ次の皿まで月の酒

貝森光洋(光大)さん逝く

王林やつがるの光立てて落つ



秋ざくら雨の力を借りて泣く  
懐かしや吉田の山を雁渡り  
らふ燭の灯のほろ酔に秋深む  
身に入むや白川の水たをやかに  
水音や茶の花垣の女坂  
ハロウインの菓子肴に般若湯  
鬼灯をもめば地軸の生臭き  
百舌鳥の尾の石叩にはまけてぬず  
生くるより死の美しとひよろろ虫

雪嶺抄

夫逝きて

笹村 政子



カンナ燃ゆ一語のこして夫逝けり

昼灯す看取りの窓や蟬しぐれ

病む夫に添ひし私と竹婦人

鈴虫の間もなく鳴くと待ちぬしに

納棺にバツハ奉ずる吾子晩夏

秋扇を膝の遺骨に開きけり

金魚玉のぞけば夫に逢へるかと

月光に夫のぬ身をゆだねけり

初月や遺影の夫に留守まかせ

夫逝くや朝な朝なに秋の声

雪卿集 せつけいしゅう

甚平

佐津のぼる

炎天

永田万年育

雑草に交らじ土手の夏あざみ

鐵路灼け髪の毛ほどの隙もなし

車前草の花轍より起ちあがる

黒服の婦人行き交ふ盛夏なり

建材を吊り上ぐクレーン青炎天

指先にしがみ付きくる落蟬よ

團欒の甚平の膝に孫坐る

信号を渡り損ねし炎天下

部屋越しに聞く帰省子の躰かな

囃ある方に打ち込む西瓜割り

一夜酒

升田ヤス子

板粕をしくと割りけり一夜酒

象鼻杯はや葉のくたと酔うてをり

白南風や水擦るやうに鷺の飛び

背を向けて何か食べをり夜店番

朝曇り鎌の切れ味悪からず

夏の柳

志方章子

夏草を刈るや雀の散りぢりに

恍惚と水飲む犬や日の盛り

ぼんやりと夏蝶の影追うてぬし

夏椿諸行無常を生きてをり

掻きあげてやりたき夏の柳かな

夜の秋

藤生不二男

夜の秋言葉少なに母の用

羅の女の脚の動きをり

蔦茂るドアの鎖されし映画館

上京の母にはづしぬサングラス

空蟬の爪の力を剥がしけり

白鷺

出口 誠

白鷺の嘴で河面をつつきけり

白鷺の二三歩の後発ちにけり

牛蛙墓園の闇にひびきけり

線香のなかなかつかぬ盂蘭盆会

止まりても翅を動かす秋の蝶

# 背を向けて何か食べをり夜店番 升田ヤス子

板粕をしくと割りけり一夜酒

象鼻杯はや葉のくたと酔うてをり

白南風や水擦るやうに鷺の飛び

背を向けて何か食べをり夜店番

朝曇り鎌の切れ味悪からず

せをむけてなにかたべおりよみせばん ますだやすこ

電灯の陰で夜店番が客に背を向け、何かを食べている。箸を使っているからどうやら夕食らしい。團欒でゆっくり夕食をとるわけにもいかない。食べ物も食卓とはちがい、仲間の商売物にちがいがなく、しかも立って食べている様子まで見えてくる。その姿が、どこか世間に背を向けているようだが、切なさや哀愁を帯びている。



# 遠花火僅かに月に届かざる

谷口 一献

大池に封じ込めたき大暑かな

蓮酒を利きて講釈辛口ぞ

熊蟬の声吟行の第一歩

蝸の余韻に浸り昏れなづむ

遠花火僅かに月に届かざる

とおはなびわずかにつきにとどかざる たにぐちいっこん

遠くの揚げ花火の上には月が上がっている。その花火を、ユーモアまじりに、お月さんに少し届かなかったね。と軽く詠んだ。物理的に月は地球から平均38万4千400キロ離れているから、ちよつとやそつとの距離ではないのだが、「僅かに」と言われたら、そのような気がする。視覚と言葉のマジック。錯覚と俳句は物理を超える。

# 雪樹集

蓮の葉 廣畑 育子

蓮の葉をお面のやうに嗅ぎにけり

高々と葉を掲げたる象鼻盃

焼鮎の骨をふはりと抜きにけり

ひとつなる庭の無花果呉れにけり

藍染の母の形見の絹扇

西日中連理の松の耐へてをり

落ち来たる檜皮葺より青蜥蜴

旅に来てひぐらしに泣く漢かな

縛られし夢を見てをり三尺寝

大池 谷口 一献

大池に封じ込めたき大暑かな

蓮酒を利きて講釈辛口ぞ

熊蟬の声吟行の第一歩

蝸の余韻に浸り昏れなづむ

糸瓜 赤松有馬守破天龍正義

糸瓜咲くだらりと生きてをりしかな

遠花火僅かに月に届かざる

青葉木菟雛の二羽ゐて夏の森

鬼百合の重なり合うて咲きにけり

篝火に鶺鴒の顔の火照りをり

鰯食ふ 溝渕 弘志

溪風に赤翡翠の声渡る

心地良き少し太めの抱き枕

青栗をもてあそびぬる女かな

夕立や土の匂ひを巻き上げて

鰯食ふたかが鰯と言ひながら

秋扇手持ち無沙汰で扇ぎをり

虫干し 住田千代子

新蕎麦の貼り紙を見て入りにけり

ほらそことほつれをかがる蜘蛛を指す

虫干の紐より帯のだらりかな

青葉木菟 延川五十昭

虫干やひらりと舞へる女紋

亡夫との恋文の束曝しけり  
そのことの一瞬止まる遠花火

空蟬 田尻 勝子

空蟬や主無き家の門柱に  
必らずや父さんと呼ぶ木下闇  
湯水のやう生命流し終戦日  
舐めてみる肩の先にや汗の味  
蚊の赤く吸ひついたままに腕



# 螢雪譚

二十九年十月一号から

(前略)

曝書するものもなくなり身を曝す

平居 澇子

人は肩の荷勸をおろすと荷下ろし症候群になるが、その峠も越えて、断捨離を決行、身一つになったよというのだ。膨大な蔵書はいくつか六甲へ渡して、作者に残った物は「思い出」という黄金の蔵書。今はすつきりして炎天に向かつて大きく伸びをしているのである。

白鷺の田毎に遊ぶ湖国かな

向日葵のうつむく方に心寄る

あさがほの白一色のゆたかさよ

六階の我呼ぶ声の目焼して

これらの句を挙げて、溼子は俳人として申し分のない力

をつけている。

山鳩の近く来て鳴く秋はじめ

大内 幸子

幸子はこのごろ味わい深い句をさらりと詠む。句の中にどこか懐かしく、母の剥いてくれた果物のような、帰省して実家の庭に立っているような気分になさせてくれる。

仰向けの蟬に触れば飛び立ちて

母の庭百日紅の明るさよ

そこべにの花に出雲の霧の雨

延川 笙子

出雲での作。底紅は木槿のことで、木槿は韓国の花。大昔半島からの渡来人が出雲に住み着

き、神話の国となった。底紅に

溜まった霧雨が紅を美しく浮かべていると詩情豊かに詠んだ。

高山の玫瑰の実の赤さかな

赤土を蹴つて飛び出す飛蝗かな

群青の川面を照らす鵜飼舟

炎天や影の動きにつきし犬

江見 巖

犬を炎天下に散歩させるのは動物虐待に斉しい。犬は人影を追って暑さから逃れようとする。まさか作者が犬の散歩をさせているのではないと思う。

夜泣きする子をつつみたる虫の声

笑ひだし勝負のつかぬ泣角力

(後略)

六花集



神無月到着順

平居 滯子

入梅や古墳の緑猛々し  
梅雨の墳濠を隔てて異界めく  
梅雨冷や安価な古書の蔵書印  
天皇陵夏至の夕日を引き込みぬ  
聖書開く泰山木の花の下

善野 焯

著莪咲くや水の匂ひの子規の庭  
子規庵の庭の藤には遅れたり  
開け放つ茶屋縦横に初夏の風  
蜷蛄の餌を離して落ちにけり  
万緑の中や蛙塗る水の音